



パース通信



Vol.12

今年度1年間交換教員として、オーストラリアのパースに赴任している英語科伊東が、オーストラリアや海外から見た日本についてお伝えします。

今回の通信は、ワークライフバランスです。一年間、日本とはまったく違う環境で働いてみた経験から、日本と西オーストラリアの生活の違いについてお話ししたいと思います。

みなさんは、*karoushi* という英単語をご存知ですか。「過労死」に当たる英単語は存在しません。なぜなら、そこまで働くという概念が英語を話す文化圏に存在しないからです。大きな文化の違いを表す言葉だと思います。

今日本では、「働き方改革」について社会全体で取り組んでいますね。残念なことですが、日本では長時間労働が常態化していて、朝早くから夜遅くまで働いても残業代ももらえないといったブラック企業の話が多く聞かれます。

労働生産性が先進国だけでなく発展途上国と比較しても際立って低くて、さらに少子高齢社会が加速的に進んで、労働人口が今後大幅に減ると考えられている日本は、「とにかくがむしゃらにひたすら仕事を長時間してさえすればよい」時代ではもうありません。

今までの日本では、10の仕事を8時間かけてする人と、16時間かけてする人だと、長時間働いている人のほうを、「遅くまで頑張っているな」と評価してきました。極端なことをいうと、10の仕事を4時間でできるように工夫した人を「あいつは楽をしている」と評価してきたとも言えます。

10の仕事を与えられて、それが8時間かかる人と4時間でできる人とは、当然4時間でできるの方が評価されるべきですね。でも、4時間でできた人には「もうできたんだ」「じゃあ、もっとできるよね」と20の仕事が与えられます。それが給料や評価にしっかりと反映されているのならば問題はないと思いますが、それが給料に直接反映されてきたかどうかは疑わしいと思います。

日本と海外とで、考え方が根本的に大きく違っていると感じたことがいくつかあります。

勤務時間内で仕事が終わらない場合、日本では時間内

にできないのは個人の能力の問題だと考えられがちで、勤務時間が終わっても残業をして、仕事を終わらせようとしています。ところが海外では、一生懸命勤務時間に仕事をしてできなければ、それは仕事を与えた側の人間が適切に仕事を割り振らなかったのだと考えます。

期日までに間に合いそうにないのであれば、日本では何が何でも担当している人が夜中まで働いたり、休日まで働いて仕事を仕上げようと思いますが、海外では人数を増やして対応するべきと考えられていて、人数を増やせない場合は、それができない会社が悪いと考えられています。期日までに残業や休日出勤をしないとできない量の仕事をその人に与えた方が、仕事をマネージメントする能力がないと評価されてしまうのです。この差はとても大きいものだと感じています。

大きな差を感じるもうひとつは、家の用事や家族の用事が何よりも優先されるというものです。オーストラリアの人たちの考え方は、「家族が全てを中心」です。ですから、お店で働いている人にも家族がいるだろうから、お店が早く閉まって当然ですし、休日に働くことになるとその分の給料は倍になることも当然のようにあります。

日本では、例えインフルエンザになったとしても「休暇を取りにくい」といった風潮もあるように聞きます。また、「休んでしまうと他の人に迷惑がかかる」と考えてしまって、なかなか休むことができないようです。考え方を変えてみると、一人が休んだだけで仕事がストップしてしまうような仕組みしか作れていない会社が組織として未熟だということですし、休んだ人の仕事が他の人たちに共有されていれば、みんな同じように都合の悪いときや体調の悪いときがあるのですから、カバーしあえばいいとなるはずで。

このように話してきましたが、最も大きな違いはお給料です。日本はオーストラリアに比べて驚くほど給料が安いです。みなさんも日本だけでなく、世界に出て働いてみてはいかがでしょうか？！

一年間パースからお届けしたパース通信も Vol.12 で最後となりました。みなさんに、オーストラリアと日本の違いや生活の様子をお届けしてきました。日本のことをもっとよく知るためにも皆さんも海外に出てみてください！一年間ありがとうございました！